

# 鳥取大学附属養護学校の高等部専攻科における教育

— 2006年度における「教養講座」の実践 —

渡部 昭 男\*

Education at Upper Secondary Department of Tottori University School for  
Children with Special Needs

— Practices of “Culture Time” in the 2006 School Year —

WATANABE Akio

キーワード：特別支援教育，高等部専攻科，教育課程，青年期，移行支援

Key Words：special support education, graduated course of upper secondary department,  
curriculum, adolescence, transition support

## 序. 課題と方法

盲・聾・養護学校（2007年度～特別支援学校）には，学校教育法第76条の準用規定により，高等学校と同様に専攻科及び別科を設置することができる。専攻科とは，別科が「簡易な程度において，特別の技能教育を施すことを目的」（同法第48条第3項）とするのに対し，「精深な程度において，特別の事項を教授し，その研究を指導することを目的」（同条第2項）とするものである（修業年限はともに1年以上）。

しかし，現時点において高等部の専攻科や別科に関する学習指導要領の定めはなく，例えば盲学校のいわゆる三療等の資格取得を目指す場合はその資格に応じたカリキュラムの整備が要請されるとはいえ，その教育課程の編成は各学校の裁量と創意工夫に委ねられている。とは言え，養護学校の高等部専攻科における教育の試みは，永らく私立7校に留まっており，盲・聾学校に比して蓄積が薄く，その教育の在り方は依然として模索の段階にある<sup>1)</sup>。

ところで筆者は，職業（準備）教育にとどまらず，専攻科の教育が果たすトランジション保障ないし移行支援の機能にかねてより着目してきた<sup>2)</sup>。そして，2006年度より鳥取大学附属養護学校（2007年度～鳥取大学附属特別支援学校）に国立養護学校として初めて高等部専攻科が開設されたことにより<sup>3)</sup>，専攻科での教育を試みる実践現場を身近に得ることとなった。筆者は，2005年度までは併任校長として専攻科の開設準備に当たり，また校長職を辞した2006年度も，特別講師として専攻科の「教養講座」で授業を受け持っている。

---

\* 鳥取大学地域学部地域教育学科（教授，akiowtnb@rstu.jp）

本稿では、鳥取大学附属養護学校の高等部専攻科における教育について、開設初年度となる2006年度の概要を整理した上で、「教養講座」における筆者の実践を中心に、その成果と課題を移行支援の視点から考察する。

## I. 2006年度における高等部専攻科の概要

### 1. 教育目標

「平成18年度 学校要覧」によると、鳥取大学附属養護学校の教育目標は、「楽しい学校生活の中で、『自分づくり』を基盤として一人ひとりの力を精一杯伸ばし、働くことに喜びを持ち、社会の一員として豊かに生きる人間を育成する」こととされており、標語は「豊かな心を持ち、生活を楽しむ子」である<sup>4)</sup>。

そして、各学部の目標=子ども像・青年像は以下のものである。

○小学部：友達の中で、よろこんで取り組む子～自分っていいな、友だちっていいな、何でもチャレンジ～

○中学部：自分なりの目あてをもって、仲間と一緒に意欲的に活動する子～見つけよう、広げよう、仲間とともに～

○高等部

(本科)：自らの課題を見つけ、特性を生かし、生活づくりに向かう生徒～思いを広げ、喜びを見つけ、自分の足であるよう～

(専攻科)：社会への関心を持ち、様々な人とかかわりながら、積極的に社会へ参加しようとする学生～まずやってみよう 自分をみつめ 広い社会へとびだそう～

児童期の小学部6年間で何ごとにも意欲的に挑戦しつつ自己肯定感を高め、思春期の中学部3年間では仲間との活動を重視し、青年期に入って高等部本科の3年で主体的に生活を創っていきけるような力をつけようとの意図がうかがえる(開設前の説明用資料として作成された「平成18年度 高等部専攻科“附養カレッジ”の教育課程」-巻末掲載-の「学生像」の記述からも変化しており、模索しながら歩んでいる様子が興味深い)。

ところで、高等部専攻科は法的には後期中等教育の延長上にあるが、鳥取大学附属養護学校では短期大学に相当する年齢段階であることを重視して専攻科の通称を「附養カレッジ」とし(初年度入学者の3人が相談して決定)、「子(子ども)」や「生徒」ではなく、「学生」という呼称を意図的に用いている。これは、すでに専攻科をスタートさせていた私立養護学校聖母の家学園(三重県)の実践<sup>5)</sup>に学んだり、大学生が身近に居るといふ国立大附属の特性をより生かそうとしたものである。すなわち、専攻科では「高等部生(生徒)ではなくカレッジ生(学生)だ」という(疑似)意識を醸成し、大人への成長・脱皮を促しつつ、社会参加する力の形成を進めようというのである(日本教育新聞2006年4月10日付け記事も参照のこと)。

開設しておよそ半年後に作成したリーフレット「附養カレッジ(通称)専攻科概要説明」では、「専攻科は学生一人ひとりの“自分づくり”を支援して、自立した豊かな社会生活に移行する力を育てます」と表明した上で、「こんな気持ちで学びたいみなさんを待っています」(学校側が求める学生像)として、以下の9点を挙げている。専攻科のアドミッションポリシーを知る上で参考になろう。

- “自分らしさ” をみつけ、もっと自分に自身をつけてから、社会に出たい
- もっといろんなことにチャレンジしてみたい
- 社会生活の仕方をじっくりと学び、くらしを豊かにする力をつけたい
- いろんな職場体験をしてから、自分がやりたい仕事みつきたい
- 人とのかかわりをもっと広げ、コミュニケーションの力を高めたい
- 自分の楽しみを広げ、余暇の時間が上手につかえるようになりたい
- 調べたい研究をして、自分の思いが相手にうまく伝わる発表がしてみたい
- グループホーム体験で、地域の仲間とくらす学習がしたい
- ひとり暮らしもできるようにになりたい・・・等々

## 2. 教育課程一週時程表・題材配当表

上記のような教育目標を達成するために、聖母の家学園、NPO 法人による見晴台学園（愛知県）、<sup>みはらしだい</sup>専修学校である八洲学園（大阪府）といった知的障害・発達障害のある青年を対象とした専攻科の先導的な試みを参考に、鳥取大学附属養護学校では「普通科2年制専攻科」の教育課程を、「くらし」「労働」「余暇」「教養講座」「研究ゼミ」の5領域（表1の注記を参照のこと）により編成することとなった。まず、2006年度の週時程表（表1）を以下に示す。

表1 2006年度の高等部専攻科週時程表

（2006年4月現在，附属養護学校作成・渡部が一部修正）

時間	曜日	月	火	水	木	金
登校時間						
8:55～9:30		くらし(健)				くらし(健)
9:30～9:35		ミーティング				ミーティング
① 9:35～10:35 (ティータイム)		くらし	労働	労働	くらし(食)	教養講座
② 11:00～12:00		昼食・休憩				
12:00～13:00		昼食・休憩				
③ 13:00～14:00 (小休憩)		研究ゼミ	くらし	余暇	余暇	くらし/労働
④ 14:05～15:05				清掃ミーティング		
15:05～15:10		清掃・ミーティング		清掃・ミーティング		

くらし(健康) 体育館やグラウンドを使ったり、校外の散歩・ジョギングを通して体づくりを行う。

くらし 生活の基礎や自分の生活をつくったり、社会資源を活用して積極的に社会参加する活動等を通して、地域で豊かに生活する力を獲得する。自分の権利を生活に生かす学習もし、グループホーム等を活用して地域や家庭での生活に生かす力を身につける。

労働 働くことにより充実した生活をおくる意味を考え、自分に適した仕事の探し方を学び、仕事に就くための準備活動をする。

余暇 休憩や休日での余暇の過ごし方を考え、文化・スポーツ・自然・社会での余暇活用の方法を学ぶことで余暇活動の幅を広げ、身につける。

- 研究ゼミ** 自分の研究テーマを追求し発表することで、コミュニケーションの手段と情報入手の方法と活用を学び、豊かな人間関係を築く力を育む。
- 教養講座** 大学の先生や学生との学習交流、地域の文化交流等で、自らの教養を高める。
- その他** 一人一人の課題に応じた学習をする。国語や数学など、教科学習も大切にしたりパソコン検定、自動車免許やヘルパー資格取得等をサポートする。

一日は「くらし(健康)」の体づくり・健康増進で始まり、「清掃・ミーティング」で終わる。学習は大きく4コマ(1コマ60分)で構成され、2コマ続きで午前・午後の別に、5領域の活動がゆったりと組まれている(水曜日は全校が早帰りで放課後は小学部から高等部までの希望者によるクラブ活動[保護者が中心となって運営])。なお、1コマ目と2コマ目の間には25分間の「ティータイム」が設けられている。また、木曜日には専攻科の給食はカットされており、午前中の「くらし(食)」において自分たちの昼食を半日かけてつくる。こうした日課の構成は、日々の生活を豊かにするとともに、「社会生活力」を養うねらいから組まれたものである。

次に、年間の題材配当表(検討案)を巻末に示す。2006年度は1年生しか在籍していないので、検討案の中の「共通」及び「1年」が実施検討の題材案である。例えば、後述する「教養講座」について見ると、「5月-新聞、7・9月-ゴミ、11月-選挙、12月-コミュニケーション、1月-福祉制度、2月-性教育、3月-法律・福祉制度」といった予定になっている。

### 3. 教育内容－「社会生活力プログラム」

鳥取大学附属養護学校では、小学部から高等部本科までの教育内容として、「段階別教育内容表」を独自に策定している<sup>6)</sup>。しかし、専攻科に関しては策定されておらず、市販の「社会生活力プログラム」を参考に、教育内容を検討しつつある。ちなみに、先にも述べた資料「平成18年度 高等部専攻科“附養カレッジ”の教育課程」(巻末資料)において、「社会生活力」の用語は「2. 教育方針」「3. 青年期の自分づくり指導の重点」などに繰り返し登場する。ここでは、市販の「社会生活力プログラム」の概要を示す。

2006年度に主に参照したのは、赤塚光子らの「社会生活力プログラム」<sup>7)</sup>である。赤塚らは、「社会生活力」を「自分の障害を的確に前向きに認識し、自分に自信をもち、社会の中で活用できる社会資源を自ら活用し、積極的に社会参加をしていく力」(p.3)のことでありとしている。そして、国際障害者リハビリテーション協会による1986年の「社会リハビリテーション」の定義、すなわち「社会リハビリテーションとは、社会生活力(Social Functioning Ability, 略称SFA)を高めることを目的としたプロセスである。社会生活力とは、さまざまな社会的な状況の中で、自分のニーズを満たし、一人ひとりに可能な最も豊かな社会参加を実現する権利を行使する力(ちから)を意味する。」(p.3)をベースに、①リハビリテーション、②生活の質(QOL)、③生活モデル、④エンパワメント、⑤パートナーシップ、⑥ノーマライゼーション、⑦社会参加という7つの基本理念に基づいて、「社会生活力プログラム」を作っている。

具体的には、「第1部 生活の基礎をつくる」(モジュール1:健康管理, 2:時間・金銭管理, 3:家庭管理, 4:安全・危機管理)、「第2部 自分の生活をつくる」(5:介助, 6:福祉用具, 7:住宅, 8:外出)、「第3部 自分らしく生きる」(9:自己の認識, 10:障害の理解, 11:コミュニケーションと人間関係, 12:性・結婚)、「第4部 社会参加する」(13:社会参加と社会資源, 14:近隣関係・地域活動, 15:就労・作業活動, 16:余暇活動)、「第5部 自分の権利をいかす」(17:障害者関

係の法律と施策、18権利の行使と擁護)の5部門18モジュール(単元・項目)から構成されている。

ところで、赤塚らの「社会生活力プログラム」は、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害・言語障害・内部障害などのある身体障害者を対象としたものであった。そこで、奥野英子らによって知的障害・発達障害・高次脳機能障害等のある人のための「社会生活力プログラム」が2006年に公刊されている<sup>8)</sup>。鳥取大学附属養護学校の高等部専攻科は知的障害・発達障害のある者を対象としており、2007年度からは新しく開発された奥野らのプログラム(5部門25モジュール)を主に参照することとなる。

#### 4. 初年度の人員構成等

専攻科の認可定員は、各学年3人の2学年計6人である。2006年度の入学者は定員通りの3人(男性2人・女性1人)であり、鳥取大学附属養護学校高等部本科からの校内進学者が2人(卒業生9人中)、他校からの進学者が1人という内訳であった<sup>9)</sup>。専攻科は私服であり、技能検定を受けて許可が下りると自転車通学も認められている。

教員側は、教頭が専攻科主任を兼務した上で担任1名とチームを組み、本科とは独自の実践を創り出す意味で、高等部本科とは相対的に独立した形態で運営された。なお、進路指導主事や教務主任が特定の授業を担当したり、必要に応じて支援に入った。また、金曜日の「教養講座」には大学教員や社会人講師が特別講師として招かれた。なお、可能な限り学生同士で相談して活動を進める気風を創るべく、担任は細かな指示を少なくして、学生たちに委ねるような心がけたクラス運営がなされた。

なお、当初は整備が間に合わずに校長室を臨時的に借用してスタートしたが、作業棟の一角に独立した専攻科室(縦7m×横9.5m、床:タイルカーペット敷、壁:ビニルクロス貼り、エアコンあり、学習スペース[アコーディオンカーテン仕切]+休憩コーナー[システムキッチン付き])が竣工し、夏休み明けには新教室への移転が実現した(入り口には「附養カレッジ」の表札が掲げられている—日本教育新聞2006年4月10日付け記事の写真において学生が掲げている表札)。

## Ⅱ. 「教養講座」の実践例

### 1. 新聞を読もう(2006年6月2・9日)

Ⅱ章では、「教養講座」について、筆者が特別講師を務めた4つの実践例を紹介する。

第一実践は、「新聞を読もう」である(略案は次頁)。これは赤塚らの「社会生活力プログラム」には特に含まれてはいないが、筆者が以前から暖めていた題材<sup>10)</sup>であり、先に述べた年間の題材配当表にも入れ込んでもらっていた。

新聞を教室に持ち込む実践としては、「NIE(Newspaper in Education, 教育に新聞を)」がよく知られている。しかし、この題材では調べ学習などの「教育臭さ」をむしろ排除して、「日々の生活において毎朝ポストに新聞を取りに行く楽しみ」をまずは伝えたかった。加えて、専攻科学生の「大人への憧れ」をくすぐるために、新聞を読むことは「大人のたしなみ」であることを強調した。初回には「新聞を読む(見る)楽しみ」(逆に苦手意識があるとすればその理由)を皆で出し合い、次時には新聞や折り込み広告に様々な情報が満載されていることを知らせて「新聞を生活に役立てよう」と呼びかけた。

### 「附養カレッジ」教養講座（略案）

講座名：「新聞を読もう」

講師：渡部昭男（鳥取大学）

日 程：2006年6月2日（金）・9日（金） 9：35～12：00

場 所：鳥取大学附属養護学校高等部専攻科ルーム

目 的：自宅や列車やバスで、大人が新聞を読んでいる姿を見ている。「新聞を読む（見る）」ことは大人の条件だ。専攻科学生「大人への憧れ」を基盤に、「新聞を読む（見る）」面白さを伝え、習慣づけを図る。さらに、「新聞」には様々な「情報」が満載されており、「読みこなす」「情報を活用する」ことにも挑戦する。

概 要：

#### ○6月2日（金）「新聞を読む（見る）楽しみ」

準備物－学生は各家庭で購読している「6月1日付け」の新聞を持参する。

9：35～10：35

- ・「大人＝新聞を読む」姿への憧れを尋ねる。一方で、苦手意識（例えば漢字が読めない等）があれば、それを探る。
- ・持参した新聞を皆に示しながら、自分自身の新聞の読み方（見方）、好きな欄などを紹介する。
- ・新聞はどのような「欄」「紙面」で構成されているのか？－日本海新聞を例に
- ・渡部－4コマ漫画「朝日新聞－ののちゃん」の面白さ

（休憩）

11：00～12：00

- ・「日本海新聞6月1日付け」で面白そうなニュースを探して読もう。
- ・どんな内容か、どこに興味を持ったか、などを発表しあう。
- ・まずは次回までの1週間、「新聞を読もう（見よう）＝大人の仲間入り」！！

#### ○6月9日（金）「新聞を生活に役立てよう」

準備物－学生は各家庭で購読している「6月8日付け」の新聞と、折り込みの「広告」を持参する。

9：35～10：35

- ・どんな「広告」が入っていたか調べる。
- ・どの「広告」に興味を持ったか、皆に紹介する。

（休憩）

11：00～12：00

- ・「テレビ・ラジオ」「映画案内」「催し物」「求人」「譲ります・譲って下さい」「訃報」「広告」欄などを読みこなし、生活に役立てよう。

「附養カレッジ」教養講座（略案）

講座名：「新聞を読もうーその2」 講師：渡部昭男（鳥取大学）

日 程：2006年9月15日（金）9：35～12：00

場 所：鳥取大学附属養護学校高等部 新専攻科ルーム

目 的：前回、「大人のたしなみ」として、「新聞を読む（見る）」ことに挑戦する気持ちが芽生えた。夏休みにも、新聞を読んだようだ。新聞とはそもそも「コミュニケーション」を豊かにする触媒である。そこで、今回は、新聞を使って「コミュニケーション」を広げ、深めることを学ぶ。

概 要：

○前半 9：35～10：35「お久しぶりです」－出会いの挨拶と近況報告の仕方

- ・専攻科の学生とは久しぶりの再会となる。そこで、まず、近況報告をし合う。
- ・挨拶の方法を教え、まず渡部から近況を伝える。

「こんにちは。お久しぶりです。」

→「こんにちは。こちらこそ、お久しぶりです。お元気ですか？」

→「有難うございます。元気しております。」

→「前回お会いしたのは、確か、6月でしたね。」

→「ええ、『新聞を読もう』の教養講座の時でした。」

→「その後、いかがですか？」

→6月、7月、8月、9月の順に尋ねる

- ・近況報告のために必要な情報を、ふりかえりながら、メモする。

6月・・・例えば、グループホーム体験と現場実習

7月・・・例えば、専攻科のTV放映、納涼祭

8月・・・例えば、夏休み

9月・・・例えば、新しい教室、学校公開

- ・近況報告をしよう！

( ) ( ) ( )・・・希望の順番に

(休憩)

○後半 11：00～12：00「新聞を使って話そう」

準備物－学生は各家庭で購読している「9月14日付け」の新聞を持参する。

- ・「日本海新聞9月14日付け」で面白そうなニュースを探して読もう。
  - ・興味を持った記事などを使って、一人5分程度、皆を自分の話の輪に引き込む。
- 例示－渡部。その後 ( ) ( ) ( )・・・希望の順番に

○時間があれば 朝日新聞連載まんが「ののちゃん」／朝日新聞「ののちゃんの自由研究」

学生たちの家は地方紙の「日本海新聞」をいずれも購読していることが事前に確認できたので、前日の新聞(当日付けは家族が読むので持ち出せない)を持参させた。初回時には、「日本海新聞」がどのような紙面・欄で構成されているのか、新聞がどのようなプロセスで出来上がるのか等を学ぶために、知り合いの記者に取材を兼ねて来校してもらった。

尋ねると、学生たちは3人ともに日頃から新聞を見てはいたが、テレビ欄・4コマ漫画かせいぜいスポーツ欄や天気予報などに限られていた。しかし、ゲストの記者から紙面構成(1面から最終面までの主な構成、曜日による工夫—毎週水曜日には若者向けの「水曜ヤング(すいやん)」の紙面がある)や紙面づくりの苦勞・喜びなどを聞き、興味を広げ、関心を高めていた。初回時が終わった後の取材に応じて学生の一人は、「テレビ欄などしか読まなかったが、これからはさまざまなニュースにも関心を持っていきたい」と話している(日本海新聞2006年6月3日付け「“大人のたしなみ”習慣に／鳥大付属専攻科／情報の活用など学ぶ」)。

初回時の学習状況を踏まえて、次時は事前に立てた略案に若干の修正を加えた。すなわち、9:35～10:35は「①先週の感想(日本海新聞6月3日付けに掲載された専攻科の記事を含む)、②大人への挑戦=新聞を読もう(前時に宿題となっていたワークシート「1週間の記録」の発表)、③新聞を使っておしゃべりをしてみよう(テレビ、野球、映画、事件など)、④水曜ヤングはどこが面白かった?」とし、11:00～12:00を「⑤広告を上手に使おう」とした(体調不良で1人欠席、出席は2人)。これまで見なかった欄にも挑戦し始めており、筆者と学生2人の計3人で記事をネタにおしゃべりすることも少し楽しめた。また、広告を使って自ら買いたいシャツを選んだり、「父の日」のプレゼントを考えたりもできた。

「新聞を読もう」のねらいとして、当初の「①新聞を読む(見る)楽しみ／②新聞を生活に役立てよう」に加えて、「③新聞で世間話をしよう」も加えた。嬉しいことに、学生たちが後に相談して日本海新聞のクラス購読が決まり、ティータイムのお喋りなど日々の学校生活に新聞が取り入れられることになった。

## 2. 新聞を読もう—その2(2006年9月15日)

約3か月後に、「新聞を読もう—その2」を開講した(略案は前頁、出席学生は2人)。今回は、赤塚らの「社会生活力プログラム」にある「第3部 自分らしく生きる」の「モジュール11 コミュニケーションと人間関係」を意識して、前半を「お久しぶりです—出会いの挨拶と近況報告の仕方」、後半を「新聞を使って話そう」とした。

前半の導入として、初回から継続している朝日新聞の4コマ漫画「ののちゃん」(いしいひさいち作)の鑑賞をまず行った。漫画「ののちゃん」は小学生の「ののちゃん」(ないし、その家族—母・父・兄・祖母及び飼犬)が主人公で、学校や家庭の出来事という専攻科学生にも身近なテーマが多い。簡潔なセリフと個性的な作画、登場人物のやり取りの妙味や4コマに凝縮された「ひねり」「落ち」といった展開の面白さが分かれば、新聞を見る楽しみも増し、また友だちとのお喋りも弾むと期待される。易しいものから難しいものまで、難易度順に筆者なりに選んだ5回分を、一緒に味わっていく。作品から作者の意図を読み解く、分からない友だちに伝える、分かった友だちから教えてもらう、そして面白さが共有された時の嬉しさ…。このように、4コマ漫画の合評には、実は様々なコミュニケーションが含み込まれている(この活動が契機となったのか、学生の一人は1年次の研究ゼミの課題として「4コマ漫画」をテーマに選び、年度末には研究発表を行ったのである)。

次に、「お久しぶりです」という演習を行った。筆者の「教養講座」では、指導の略案を作成す



## 「附養カレッジ」教養講座（2006.9.15.）ワークシート

「新聞 <small>しんぶん</small> を読 <small>よ</small> もうーその2」	名前
---	----

目的：新聞とはそもそも「コミュニケーション」を豊かにするものである。そこで、今回は、新聞を使って「コミュニケーション」を広げ、深めることを学ぶ。

○前半 9：35～10：35「お久しぶりです」－出会いの挨拶あいさつと近況報告きんきょうほうこくの仕方

1) まず、私に、近況を色々たずと尋ねてください。

渡部「こんにちは。お久しぶりです。」

→「こんにちは。こちらこそ、お久しぶりです。お元気ですか？」

渡部「有難うございます。元気にしております。」

→「前にお会いしたのは、確か、6月でしたね。」

渡部「ええ、『新聞を読もう』の教養講座の時でした。」

→「その後、いかがですか？」

渡部「そうですね。6月は・・・。」

→（6月）7月、8月、9月の順に尋ねる

2) 今度は、私が、皆さんに一人ずつ、近況を尋ねます。まず、メモをつくりましょう。

月	どんなことがありましたか。
6	例えば、グループホーム体験や現場実習
7	例えば、専攻科のTV放映や納涼祭
8	例えば、夏休み
9	例えば、新しい教室への引越しや学校公開

## ○後半 11：00～12：00「新聞を使って話そう」

- ・「日本海新聞9月14日付け」で面白そうなニュースを探して読もう。
- ・興味を持った記事などを使って、一人5分程度、皆を自分の話の輪に引き込む。

るとともに、学生たちにはワークシートを毎回用意している。今回は、筆者がまず学生たちから尋ねられて近況報告をし、次に役割を転じて学生たちが筆者に尋ねられて各々近況報告するのであるが、ワークシート(次頁)には「対話のひな形」と「近況報告用のメモ欄」を設けた。ワークシートに助けられて、近況報告のやり取りがかなりできた。

後半の「新聞を使って話そう」は、「話そう」と特に身構えるのではなく、ティータイムのお喋りから始めてさり気なく進めた。テレビ欄やスポーツ、お天気から社会面の事件など、6月から3か月を経て学生たちの話題は確実に広がっていた。

後日談になるが、平成18年度公開研究会(2006年12月5日)における専攻科の公開授業「グループホーム体験 Part 2」で、「どんな方法でホームの人と仲良くなるか」という設問に対して、担任が提案した「お茶菓子を持参して会話のきっかけをつくる」という他に、「新聞が役に立つ」という回答も出て、日々の新聞購読やティータイムの成果ではないかと筆者を唸らせたものである。

### 3. 選挙について知ろう(2006年11月10・17日)

年間の題材配当表では、11月の教養講座のテーマは「選挙」であった。そこで、11月26日投票予定の鳥取市議会議員選挙を採り上げることにした(略案は次頁)。2007年度中には3人はいずれも成人を迎えることもあり、①民主主義と選挙、②県や市町村の仕事と私たちの生活、③鳥取市(市町村)の仕組み[以上が初回時]、④選挙管理委員会への訪問[次時]という構成とした。赤塚らの「社会生活力プログラム」では、「第5部 自分の権利をいかす」の「モジュール17 障害者関係の法律と施策」「モジュール18 権利の行使と擁護」に該当する。また、鳥取市選挙管理委員会を訪ねる活動には、「第3部 自分の生活をつくる」の「モジュール8 外出」、「第4部 社会参加する」の「モジュール13 社会参加と社会資源」も含まれる。

尋ねると、学生3人の内の2人が鳥取市在住であり、ポスター掲示板が立てられ始めたこともあって鳥取市議会議員選挙があるらしいことは知っていた。また、「大人(成人=20歳)になると投票できる」ことは3人とも理解し、「大人への憧れ」も持っていた。しかし、2006年度中はまだ未成年であるために、選挙へのリアリティや関心は薄かった。これは予め予想されたことでもあり、初回時の座学の上に、選挙管理委員会への訪問・インタビューを行う次時の活動に山場を設け、重視した。

鳥取市選挙管理委員会を訪問するには、①選挙管理委員会の場所の確認、②往復の交通機関や時刻の確認、③選挙管理委員会へのアポイントメント、④インタビュー内容の検討などが事前が必要となる。筆者が鳥取市選挙管理委員会のホームページから取った地図を用意し、学生たち3人が相談しながら、①～④の事前準備を進めた(なお、選挙管理委員会には前もって筆者より電話を入れ、高等部専攻科や教養講座の概要、訪問の趣旨などを内々には伝えておいた)。

①②は、公共交通機関を使った日頃の校外活動の経験から、実にスムーズに行えた。また、往きは訪問先近くに停留所のある便利な「バス」で、帰りは少し遠回りをして趣味の「列車」でというように、経路の選択にもこれまでの活動の蓄積による幅とゆとりがうかがえた。③は、11月下旬にある「全国専攻科研究集会」(愛知)への参加計画を立案する際に、分からないことを携帯電話を使って尋ねる活動(名古屋のガイドブックが書店にあるか、名古屋までの運賃などの問い合わせ)を行っており、電話依頼の仕方を考える役・電話をかける役・側で話し方をアドバイスする役を分担してやり遂げた。④も、各自が一つ以上の質問を準備した。

訪問日当日は、学生3人に担任と筆者が付き添って出かけた。取材時間は20分程度であったが、

### 「附養カレッジ」教養講座（略案）

講座名：「**選挙について知ろう**」 講師：渡部昭男（鳥取大学）

日 程：2006年11月10日（金）・17日（金） 9：35～12：00

(7)11月10日－鳥取市議会議員選挙について知ろう

(4)11月17日－選挙管理委員会を訪ねよう

**趣 旨**：成人になれば選挙権を得る。選挙（投票）は国民の権利である。また、幸せに暮らせる世の中を創るために、大切な営みでもある。「成人＝大人＝選挙」という「大人への憧れ」を基盤に、民主主義の根幹となる「選挙」について学ぶ。加えて、「選挙」や「市政」に関する情報を自ら集めたり、使い勝手が悪いと改善を要求することにも挑戦する。

\* 権利擁護・権利行使，社会参加の力を形成する

**準備物**：とっとり市報，とっとり市議会だより，とっとり県政だより

[9：30～10：30]

はじめに ○お久しぶりです－前回9月以降の近況報告

○頭の体操－朝日新聞「ののちゃん」

#### 1. 「選挙」について知っていること－鳥取市議会議員選挙：11月26日投票日

- ・ 児童生徒会の選挙
- ・ 両親・家族の投票行為
- ・ テレビ等による報道
  - 大人にならなくてもできる選挙・投票－児童生徒会，職場・ホームの自治会など
  - 大人になったらできる選挙・投票－市町村，都道府県，国

#### 2. 幸せに暮らすには－県や市町村の仕事

- ・ 大人になってからの夢
  - 住むところは？ 一人暮らし，友達とグループホーム，結婚して，両親と一緒に
  - 仕事は？／お給料は？
- ・ 生活を支える県や市の仕事
  - ゴミ／水道／警察／消防／バス

(休憩)

[10：50～11：50]

#### 3. 鳥取市の仕組み－市長・市議会・選挙

- ・ 市議会はなにをするの？
- ・ 市議会議員選挙について聞きに行こう。
  - 来週は「鳥取市選挙管理委員会」へ・・・訪問の計画づくり／訪問の電話依頼

選挙に関して簡単な説明をうかがった後で、「立候補者は何人」といった質問や、「(選挙広報などの)漢字に振り仮名を付けてほしい」という要望が出された。後者については、「4月の鳥取市長選から投票所の候補者の名前に振り仮名を付けている」「(選挙広報は)候補者の文章になるので手を加えることは難しいが、音声で内容を聞くことができるので活用してほしい」等、これまで知らなかった事からの補足や助言を受けることができた(日本海新聞2006年11月18日付け「振り仮名表記 選管訪れ要望/鳥大付属養護学校 高等部市議選学習」)。

#### 4. 聴覚障害のある青年と交流しよう(2007年1月12・19・26日)

筆者担当が4度目となる1月教養講座の題材として担任から寄せられた相談は、「人権教育の一環として」「保護者参観も兼ねた企画で」ということであった。筆者が提案したのは、社会人講師による特別講義や学校参観も交えた「聴覚障害のある青年と交流しよう」である(略案は次頁)。

「全国専攻科研究集会」(11月、愛知)に参加して全国の養護学校高等部専攻科の青年たちと交流する機会を持ったことを踏まえて、今回は障害は異なるが鳥取県内の青年たちと交流しようという趣旨である。赤塚らの「社会生活力プログラム」にある幾つものモジュールと関連するが、中でも「第3部 自分らしく生きる」の「モジュール9 自己の認識」「モジュール10 障害の認識」を主に意識した。特に「障害の認識」について、筆者は①障害そのものに関する科学的な認識、並びに②障害のある人々への具体的な理解・認識の双方が保障されることが重要と考えている。とりわけ②は、固有名詞をもった人(〇〇さん・△△くん)と直接出会って、場・時・空間・経験を共有することが肝要であると考えている。

ところで、同内容の講義は鳥取大学地域学部地域教育学科の「特別なニーズ教育論」(1年次前期、盲学校見学を含む)・「障害児教育論」(2年次後期、聾学校見学を含む)で実施しており、点字や手話への誘い、学校への訪問見学、障害のある当事者や学校関係者による特別講義を組み合わせる等の工夫を凝らしており、専門科目ながら教養科目に類した内容となっている。大学1・2年生に定評のある講義を、同じ年齢層＝青年期にある専攻科学生にも同様に提供し、体験させたいとの思いもあった。大学の講義の3コマ分(1コマ90分)をベースに教養講座用にアレンジし、進行をゆったりする(1回120分相当)とともに、上述のような直接の出会いを重視して第2次における専攻科学生と聾学校生との交流場面を中心に据えた。

第1次(1月12日)「聴覚障害について知ろう」では、大学でもお世話になっている鳥取聾学校元教諭の塩田達夫氏に特別講義をお願いし、①鳥取聾学校の紹介、②きこえの仕組み、③簡単な指文字や手話を教えていただき、④手話や指文字による挨拶や自己紹介を練習した。また、第2次(1月19日)「聾学校を訪ねよう」では、聾学校高等部の授業を参観した後に、塩田氏による手話通訳の手助けも得て、高等部本科1・2年生との交流を行った。双方ともに筆者は所要で欠席であり、第1・2次の実際については第3次に専攻科学生から報告を受けることにした。

実質的には、第3次(1月26日)「交流したことをふりかえろう」が筆者担当の時間である。第1・2次の展開や成果を踏まえて、「人権教育」の視点から振り返させるのではなく、相互交流・相互理解は喜びであり今後も続けていこうとの観点を強調する意味で、第3次のタイトルを「コミュニケーションは楽しい」に修正した(学生用ワークシートは次々頁)。

前半は、筆者が欠席した第1・2次の学習についての報告である。撮影した写真を上映しながらその様子を3人各々が嬉々と発表し、手話・指文字による挨拶や名前の自己紹介も再現してくれた。特に学生の一人(女性)は、毎日の通学列車の中で出会っていた女生徒が実は聾学校の高等部生で

「附養カレッジ」教養講座（略案）[1月「人権教育」の一環として]

単元名：「聴覚障害のある青年と交流しよう」

**趣 旨：**専攻科1年生の3名の学生は、11月に愛知県で開催された「全国専攻科研究集会」で他校の養護学校高等部専攻科の青年たちと交流する機会を得た。今回は対象を広げて、同じ鳥取県に住んでいる障害青年との交流を行う。具体的には、聴覚障害のある青年と交流する中で、①きこえ（聴覚障害）の仕組み等への理解、②簡単な手話や指文字などの活用によるコミュニケーション、③聾学校の場所や教育活動への理解、④障害種を越えた青年同士の交流、⑤社会参加と人権保障の促進などを図りたい。

**社会生活力：**モジュール8「外出」、9「自己の認識」、10「障害の理解」、11「コミュニケーションと人間関係」、13「社会参加と社会資源」、18「権利の擁護と行使」

第1次－1月12日（金）＝題材：「聴覚障害について知ろう」

- \*専攻科学生3名－本城教諭&特別講師・塩田健夫氏によるTT。（渡部は不在）
- 特別講師の塩田氏から、①聾学校の紹介、②きこえの仕組みを教えていただいた後に、③簡単な指文字や手話を学ぶ。休憩後に、翌週行う挨拶や自己紹介を練習する。
- ☆宿題－①聾学校のホームページを見ておこう。写真部が出した写真集などもあるよ。
- ②聾学校への行き方を相談して決めておく。
- ③聾学校での専攻科紹介（自己紹介を含む）を考えて、練習しておく。

第2次－1月19日（金）＝題材：「聾学校を訪ねよう」

- \*専攻科学生3名（＋体験入学生1名の計4名）＋本城教諭・藤原教頭。（渡部は不在）
- \*特別講師・塩田氏（手話通訳）は自家用車にて聾学校へ。現地にて合流。
- （○早く到着すれば、その時間をつかって3時間目開始までは他学部などを参観）
- 3時間目：高等部授業を参観
- 4時間目：高等部本科1・2年合同の授業枠を使って相互交流
- \*障害が違うことなどから生じる相違点などを理解した上で、同じ青年として相互に友情を育み、連帯を深めよう
- ☆宿題－交流した様子をまとめておく。

第3次－1月26日（金）＝題材「交流したことをふりかえろう」

- \*専攻科生3名＋本城教諭&渡部
- \*2回とも不在だった渡部に学習の報告をしよう（自らの活動を振り返り、発表する）。
- \*聾学校の仲間と塩田氏にお礼の手紙を書こう。
- 休憩後から保護者参観日を兼ねる
- \*コミュニケーションに関する教養を広げよう
- 渡部より－ヘレン・ケラーとグラハム・ベルの話
- ☆宿題－お礼の手紙を出しておく。

「附養カレッジ」教養講座(2007.1.26.) ワークシート [2頁分を1頁に圧縮して掲載]

## コミュニケーションは楽しい

【前半】9:30～10:30「いろいろなコミュニケーション」

○4コマ漫画でコミュニケーションー「ののちゃん」[描くー読む]

○お久しぶりでですー塩田先生と学んだ2回の「教養講座」について発表ー[話す]

1月12日(金)

1月19日(金)

○塩田先生とろう学校のみんなにお礼の手紙を書こう[書く]

塩田先生へ

ろう学校のみんなへ

○ヘレン・ケラーを知っていますか?

徳永寿美子『ヘレン・ケラーー三重苦をのりこえた愛の人』偕成社、1994年84刷

(見えない)(聞こえない)(しゃべれない) \* ( )内は学生自身で記入  
アニー・サリバン先生はヘレン・ケラーにどのように教えたか?

【ティータイム】10:30～11:00

【後半】11:00～12:00「コミュニケーションと電話」[保護者参観]

○あなたにとって「携帯電話」は～どのくらい大切? \*糸電話と教材ビデオを準備

(持っている, もっていない)(毎日使っている, 時々使っている, ほとんど使わない)

①電話の発明者ー(グラハム・ベル)

モールス信号機 トン・ツー・トン・ツー・・・1対1  
→多重通信機 1対多数

→電話 1876年3月10日に誕生 1対1 しかも人の声  
1876年フィラデルフィア博覧会・・・130年前のこと!

②妻ーメイベル・ハバード

視話法/1877年結婚/「大切な人をもたない人間は 完全な大人とはいえません」

③父ーメルビル

視話法(発声法)の開発者/大学の先生ー話し方を教える

④母ーイライザ

補聴管/手話/「人の仕事を決めるのは 自分ではなく 境遇である」

⑤私は話すことを教える教師です

出会いー1887年(ヘレン・ケラー)ー(ベル)ー(サリバン)

1922年8月2日 病気で亡くなる 75歳

○電話=聞こえない人たちからの贈り物

○「話すだけの電話」から「文字や絵も送れる電話」へ=聞こえない人も使える電話

感想

あることを初めて知り、互いの自己紹介を通じて友だちになれたのであった。ちなみに、児童生徒年間作品集である鳥取大学附属養護学校『雲』29号（2007年3月）には、専攻科学生は2作品ずつを選んで収録してあるが、聾学校との交流は特に印象深かったようで、3人の内の2人が「聾学校の人たちと交流して」と題した作品を載せていた<sup>11)</sup>。

後半は、「コミュニケーションと電話」と題して、用意した糸電話の実演から入り、グラハム・ベル（とその家族）に関するTV番組の録画を観ながら、電話の発明、視話法、ヘレン・ケラーとの出会いに関する秘話を、保護者と一緒にまさに教養講座として学んだ。

### Ⅲ. 2006年度における成果と課題

#### 1. 「二重の移行」への支援

高等部専攻科は、先行する盲学校・聾学校においては三療などの資格取得や職業準備教育の機能においてその役割を發揮してきた。特に盲学校の場合、中途失明者への再教育及び職業準備教育機関としての役割も併せ持っており、進学者の年齢は様々である。

これに対して、養護学校に関しては、これまでの私立7校はすべて職業科ではなく普通科として認可を受けており、学校によってその教育内容にバリエーションはあるものの、あくまでも普通科の範囲においてであった。その意味で、特定の資格取得や職業準備が目的ではなく、就労を含む広い意味での社会参加の準備を目指した機関である。また、高等部本科から連絡して進学するケースがほとんどであり、年齢的には青年期に当たる者で構成されている。

鳥取大学附属養護学校の高等部専攻科も、職業科として設置申請する選択肢もなくなかったが、施設設備や教職員配置が職業科用には整っていないこと、鳥取県がすでに始めていた知的障害者職業訓練事業とバッティングしない配慮、附属養護学校の教育目標「生活を楽しむ子」を実現するには普通科がむしろ相応しい等の理由から、普通科として申請し開設された<sup>12)</sup>。また、高等部（高等学校）本科修了など、専攻科受験資格があれば年齢は問うておらず、また過年度の本科卒業者からの問い合わせもあったが、実際に入学した者は高等部本科からの進学者となっている。

そこで筆者は、養護学校高等部専攻科の機能として、かつて OECD / CERI（経済協力開発機構・教育革新センター）が学校からのトランジション（transition, 移行）を狭く就労にとどめず、「大人となること」「成人期への移行の全局面を包含した概念枠組み」として幅広くトータルにとらえていることに改めて着目した<sup>13)</sup>。すなわち、「学校から社会へ」「子どもから大人へ」という「二重の移行」への支援機能を持っていると認識し、その方向での実践を蓄積し、教育課程等を開発することが国立養護学校「初」の高等部専攻科としての社会的・歴史的な責務であると考えている。本稿で紹介したように、その第一歩は試行錯誤しながらも、着実に踏み出されたと見てよい。

#### 2. 指導の留意点と学生たちの変容

では実際に「二重の移行」への支援において、どのような留意点の下に指導が行われ、1年目の実践を通して学生たちはどのように変容したのであろうか。

##### 2-1. 担任によるまとめ

最初の資料は、本城陸子教諭による「鳥取大附属養護高等部専攻科の概要」(『第3回全国専攻科(特

別ニーズ教育)研究集会～もっと学びたい!専攻科の学びを考える～』収録,2006年11月23日)である。まず指導の留意点であるが,専攻科における2006年度の実践研究のテーマを「“七転び八起き”の自分づくり～専攻科での学習を通して～」と設定し,「悩んだり葛藤しながら活動に取り組み,成功した場合もそうでない場合も,ふりかえり事項を次の活動へいかそうとすること,ねばり強くチャレンジしていこうという意欲を身につけることで,“ほんものの力”が身に付き,自分の思いを持って,意欲的に社会へ飛び出すことができる」との考えの下に,「〈活動前〉★複数の選択肢→自己選択・自己決定/〈活動中〉★見守る支援・適切な位置 ★じっくり待つ ★臨機応変/〈活動後〉★ふりかえる(具体的に) ★さらなる課題」という諸点に整理している。

次に学生の変容であるが,当初の実態としては,「社会での人とのかかわり方や社会資源の活用方法など,いざ一人で行動するとなると未経験なことや不安なことが多く,『やってみたくて,どうやったらよいかかわからない?』『たしか,先生(家の人)はこんな感じでやっていたような…』『一人はちょっと不安だなあ…できるのかなあ…』などの思いを持ちながら,試行錯誤を繰り返し,学習に取り組んでいます。また,3人の関係は,年度当初はそれぞれ自分のことで精一杯だったり,教師とのかかわりが多かったりしたこともあり,友だち同士でかかわることや協力してなにかをするという姿はあまり見られませんでした。」(p.43)と描写されている。これに対して,「大きな変化としては,年度始めは何かに取り組む際,教師を気にする場面が多く見られましたが,そのような場面が減ったとともに,友だち同士のかかわりが増えてきたことや,自信を持って様々な活動に取り組む姿が多く見られるようになってきたことがあげられます。その他,①すぐに教師に尋ねたり,ぼーっとしていたりするのではなく,まず自分で考えてみようとするものが増えてきました。また,分からないときには自分から友だちに尋ねる姿も増えてきました。②多くの人とのかかわりを持ったことで,そのことにも慣れ,大きな声で話すことができたり,自分から話しかけたりすることができてきました。③自分が選択した活動ということで意欲的に取り組むことができました。また,必ず選択肢を提示したり一緒に考えたりしたことで,思いつく選択肢の幅が広がってきました。さらに,活動後に振り返り,次回の選択時の参考にしようとする学生もいました。④多くの社会資源の存在を知ることができました。⑤『楽しかった』などという感想ではなく,『～の～(どんなどころ)が～(どう)だった』というような振り返りをする場面が見られ始めたり,振り返る際の視点を知ることができたりし始めた学生が出てきました。」(pp.45-46)と,まとめられている。

なお,課題としては,「学習内容のさらなる充実や記録・評価の在り方についての検証,それぞれの学生の『自分づくりの段階』へのさらなる理解や,それを大切にされた適切な支援の在り方を深めていくこと」(p.46)などが挙げられている。そして,「学生達は様々な力を持っているということを確認しました。我々教師は青年期にある学生達であることを意識することに加え,『活動場面では,余分な口出しをひかえ,じっくりと待つこと』『余裕のある時間配分をし,じっくり活動に取り組める時間を確保すること』『活動を発展させながら継続していくこと』等を大切にし,学生達が持っている力をゆっくりと確実に発揮できるような環境を整えていかなければならないということを感じました」(p.46)と締めくくられている。

## 2-2. 主任によるまとめ

2番目の資料は,藤原章教頭兼専攻科主任による「平成18年度公開研究会 高等部専攻科分科会七転び八起きの自分づくり～専攻科1年目のチャレンジを通して」(2006年12月5日)と題したブ



レゼンテーション資料である。担任のまとめと重複する部分を割愛し、学生の「自分づくりの段階」に即した箇所を主に示す。

まず、「自己形成視獲得の時期」にあると思われるAさんについて、「4月 指示待ちの多いAさんだが いろんな体験がしたいという憧れを大切にし／『だんだんと変化してきた』自分に手応えを感じる時期を活かし／やればできるという期待感を持って取り組めるというよさを発揮し／指示待ちや経験依存から自発性が開花するように／過去の自分と比べて大きくなった今を誇りに思うことができる自分づくりができる支援に」（スライド No. 3）という実態認識と留意点の下に指導がなされ、その結果として「現在 自分なりの調べ方に自信をもつことで 交通調べを自分の仕事として進んで取り組む／職員室にきて電話帳で調べる『だんだんと変化してきた』自分に手応えを感じる／やればできるという期待感で、いろんな行き方帰り方も調べられる自分に自信／拡大した選択肢から最良のものを見つけようと選択しはじめる／過去の自分と比べて大きくなった今を誇りに思うことができる自分づくりができつつある」（スライド No.54）という変容が記述されている。

次に、「社会的自我の芽生えの時期」にあると思われるBさんについて、「4月 周りの関係に気づかないBさんだが ひとりぐらしの憧れを大切にし／みんなの中での自分への意識が芽生える時期を活かし／『大人になりたい』という気持ちから自分を高めようとするよさを発揮し／一緒にだけ違う、でも一緒に気づきはじめるように／社会生活で『ちょっと大人になった』喜びを感じることでできる自分づくりの支援に」（スライド No. 4）という実態認識と留意点の下に指導がなされ、その結果として「現在 社会生活のなかでの一人暮らしができる力を求め、友達と一緒に活動しようとする／みんなの中での自分が肯定でき、教室での学習を楽しんでいる／仲間と一緒になら新しいことにも進んでチャレンジする／友達のそれぞれのよさに気づきはじめる／社会生活で『ちょっと大人になりつつある』自分を感じる自分づくりができつつある」（スライド No.55）という変容が記述されている。

最後に、「価値的自立のはじまりの時期」にあると思われるCさんについて、「4月 やや幼くて、やや“自己中”だったが 『大人らしくなりたい』という憧れを大切にし／大人社会の価値だけではなく、自分たちの価値観を持つようとする時期を活かし／自分が独自の存在であることを発揮し／自己の内面に目を向けて育つように／集団の中での役割や人のために役立つ自分づくりの支援に」（スライド No. 5）という実態認識と留意点の下に指導がなされ、その結果として「現在 友達と自分の関係を見つめ、それぞれの力が発揮されるように活動しはじめた／専攻科らしいアイデアをだそうとする／3人のよさが発揮されるように気遣う／以前の自分と比較した振り返りをするようになってきた／集団の中での役割や人のために役立つ自分づくりができはじめた」（スライド No.56）という変容が記述されている。

3人共通の育ちとして「①まず、自分で考えるようになった／②自分から話しかけるようになった／③意欲的に選択し、幅をひろげるようになった／④利用できる社会資源が増えつつある／⑤的を得た振り返りができつつある」（スライド No.57）とまとめた上で、今後の課題としては「①『自分づくり』の段階を生かした支援のさらなる工夫／②専攻科教育のPRと発展／③重点化した内容でじっくり活動／④継続と2年次の発展／⑤学習環境の整備」（スライド No.58）を挙げている。

### 3. 教育課程及び指導のあり方

OECD／CERIによる障害青年のトランジション研究では、①自律と自立、②生産的活動、③

社交関係・地域参加・レクリエーションと余暇活動, ④家庭での役割履行という4領域を想定していた。また, 赤塚らの「社会生活力プログラム」では, 既述のように「生活の基礎をつくる」「自分の生活をつくる」「自分らしく生きる」「社会参加する」「自分の権利をいかす」の5部門が提示されていた。これらに対して, 鳥取大学附属養護学校では, 先行する私立養護学校高等部専攻科の試みも参照して, 「くらし」「労働」「余暇」「教養講座」「研究ゼミ」の5領域で教育課程を編成しようとしている。

専攻科の教育課程を確立することは残された大きな課題であるが, 専攻科がスタートしてむしろクローズアップされたのは高等部本科, さらにには中学部における教育課程と指導のあり方である。OECD / CERI のトランジション研究は, 「学校から社会へ」「子どもから大人へ」の移行は14・15歳から20歳台半ば頃までにおよぶ継続的な営みであるとみなしている。そうであるならば, 「二重の移行」への支援プログラムは学校教育段階で言えば, 高等部本科はもちろん, 思春期の暦年齢にある中学部からの関連性の上に構築されなければならない。しかし, 中学部も高等部本科も, その教育課程は学習指導要領という既定の枠組みで縛られている。すなわち, 例えば OECD / CERI のいう4領域, 赤塚らの「社会生活力プログラム」のいう5部門18モジュール(ないし奥野らのいう5部門25モジュール), 鳥取大学附属養護学校高等部専攻科のいう5領域が, 学習指導要領でいう各教科・道徳・特別活動・自立活動などどのような連関にあるのかが問われるのであり, 移行支援の視点から高等部本科や中学部の教育課程自体を逆に組み直す発想も出てこよう。

また, 指導のあり方についても, 鳥取大学附属養護学校では前述したような専攻科における指導の留意点や指導の実際, その下での学生の変容を目の当たりにすることによって, 「高等部本科までがむしろ『手をかけすぎた指導』だったのではなかったのか」という反省も出されている。

こうした諸点も含めて, 2007年度も引き続き, 継続した試みとその検証を行っていききたい<sup>14)</sup>。

追記: 専攻科の3人の学生たち, 「教養講座」の授業機会をいただきました土井康作校長はじめ鳥取大学附属養護学校の皆様, 資料提供を受けた中林公子副校長, 藤原章教頭兼専攻科主任(2006年度), 本城睦子教諭, 國本真吾鳥取短期大学講師に, 記して感謝したい。なお, 本稿は平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(C)19530872: 養護学校高等部等の専攻科における教育の在り方—二重の「移行支援」に着目して—)による研究の一環に位置づくものである。

## 《注》

- 1) 渡部昭男(1998)「養護学校における高等部専攻科の試み—学校から社会へのトランジション保障の視点から—」『鳥取大学教育学部 教育実践研究指導センター研究年報』(7), 渡部昭男(1998)「私立養護学校の高部専攻科における教育課程の特色—本科と専攻科との関連を中心に—」『鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)』40(2)。
- 2) 上記の2編に加えて, 渡部昭男(1997)「障害を有する青年のトランジション保障と職業教育のあり方」『障害者問題研究』25(2), 渡部昭男(1997)「『障害者の青年期教育学』試論」『心理科学』19(2), など。
- 3) 渡部昭男(2006)「国公立養護学校『全国初』となる高等部専攻科の開設—鳥取大学附属養護学校の試み—」『障害者問題研究』34(2)。
- 4) 「生活を楽しむ」「自分づくり」といった独自の用語・概念に関しては, 鳥取大学附属養護学校(2005)『自

- 分づくり」を支援する学校－「生活を楽しむ子」をめざして』明治図書，鳥取大学教育学部附属養護学校(2002)『「生活を楽しむ」授業づくり』明治図書を参照のこと。
- 5) 田中良三・養護学校聖母の家学園(1999)『養護学校専攻科の挑戦－高等部5年教育の試み』かもがわ出版。
  - 6) 鳥取大学附属養護学校が独自に作成した教育内容表で、「自立化・社会化・表現化・職業化」の4つの分野に、「1段階－0～2歳，2段階－2～3歳，3段階－3～4歳，4段階－4～5歳，5段階－5～7歳，6段階－7歳～」の6つの段階に応じて，教育内容を配列したものである。1979年の初版以降，1981・1984・1998年に改訂版が出ている。なお，2006年度より3年計画で，「自分づくりを基盤とした教育の創造～段階別教育内容表の改訂を通して～」の研究テーマの下に改訂作業が進行中である。
  - 7) 赤塚光子・石渡和実・大塚庸次・奥野英子・佐々木葉子(2003)『社会生活力プログラム・マニュアル－障害者の地域生活と社会参加を支援するために－(第2版)』中央法規。なお，初版は1999年である。
  - 8) 奥野英子・関口恵美・佐々木葉子・大場龍男・興相理・星野晴彦(2006)『自立を支援する社会生活力プログラム・マニュアル－知的障害・発達障害・高次脳機能障害等のある人のために－』中央法規。5部門は同様であるが，「第1部 生活の基礎をつくる」(モジュール1：健康管理，2：食生活，3：セルフケア，4：時間管理，5：安全・危機管理)，「第2部 自分の生活をつくる」(6：金銭管理，7：住まい，8：そうじ・整理，9：買い物，10：衣類管理)，「第3部 自分らしく生きる」(11：自分と障害の理解，12：コミュニケーションと人間関係，13：男女交際と性，14：結婚，15：育児)，「第4部 社会参加する」(16：情報，17：外出，18：働く，19：余暇，20：社会参加)，「第5部 自分の権利をいかす」(21：障害者福祉制度，22：施設サービス，23：地域サービス，24：権利擁護，25：サポート)というように，モジュールが25に拡充されている。
  - 9) 新版K式発達検査による発達年齢はおよそ4歳半・7歳半・12歳ころ，鳥取大学附属養護学校の設ける「自分づくりの段階」では「自己形成視獲得の時期」「社会的自我の芽生えの時期」「価値的自立のはじまりの時期」とされている(鳥取大学附属養護学校 [2006]「平成18年度公開研究会 高等部専攻科学習指導案」)。
  - 10) 1997年に私立三愛学舎(高等)養護学校の専攻科を調査で訪ねた際に，筆者は列車で通学する専攻科生の集団と偶然一緒になった。専攻科生たちは，列車に乗り込むなりカバンから冊子を取りだして，思い思いに読み始めた。冊子は，よく見ると『TVガイド』『るるぶ』『めばえ』など様々である。ある人は冊子を逆さまに持っていたから，「読む」というよりは「見ていた」といった方が正確かも知れない。通勤途上の列車で本や新聞を広げる大人のような専攻科生の振る舞いに，筆者はいたく感動した。
  - 11) 『雲』第29号に収録した3人の作品は，「研修旅行」「乗り放題キップで一人旅」，「グループホームの生活」「聾学校の人たちと交流して」，「ふれあいピック」「聾学校の人たちと交流して」となっている。
  - 12) 開設に至る経緯の詳細は，前掲の拙稿(2006)「国公立養護学校『全国初』となる高等部専攻科の開設」に詳しい。
  - 13) OECD／CERIによる障害青年のトランジション研究に関しては，前掲の拙稿(1997)「障害を有する青年のトランジション保障と職業教育のあり方」において紹介している。
  - 14) 2007年度においては，新たに1年生が5人(男性2人・女性3人)／校内進学者2人・他校からの進学者3人)入学し，複式編制により2学年8人の学生がともに学んでいる。担任も1人増えて2人となり，主任(教頭の兼務)を含む3人がチームを組んで指導に当たっている。2007年度は2006年度の試みを継続発展させるとともに，専攻科卒業生を初めて送り出す年度でもあり，さらに新たな実践的課題を有した年度と言えよう。

## 《専攻科開設1年目に関する資料》(発行年月順)

- ・鳥取大学附属養護学校プロジェクトチーム(2005)「専攻科設置に向けて」『特別支援教育の創出～個々のニーズに応じた生涯支援の構築～鳥取大会要項』(第25回日本教育大学協会全国特殊教育部門合同研究会・

平成17年度鳥取大学附属養護学校公開研究会(2005年12月2～3日) pp.49-52。

- ・鳥取大学附属養護学校高等部専攻科(2006)「平成18年度 高等部専攻科“附養カレッジ”の教育課程」(説明用1枚資料, 3月)。
- ・鳥取大学附属養護学校(2006)「平成18年度 学校要覧」(リーフレット形式, 4月)。
- ・國本真吾(2006)「鳥取大学附属養護学校に高等部専攻科が設置!」『障害者教育科学』51号, pp.2-4。
- ・渡部昭男(2006)「国公立養護学校『全国初』となる高等部専攻科の開設－鳥取大学附属養護学校の試み－」『障害者問題研究』34巻2号, pp.57-62。
- ・鳥取大学附属養護学校(2006)「専攻科校舎等改修工事 平面詳細図」(図面)
- ・鳥取大学附属養護学校(2006)「附養カレッジ(通称)専攻科概要説明」(リーフレット形式, 9月)。
- ・鳥取大学附属養護学校高等部専攻科(2006)「くらし 学習指導案『研修旅行に行こう』」(校内研究会用指導案, 2006年9月12日)。
- ・鳥取大学附属養護学校教諭・本城陸子(2006)「鳥取大附属養護高等部専攻科の概要」『第3回全国専攻科(特別ニーズ教育)研究集会～もっと学びたい!専攻科の学びを考える～』(要項冊子, 於:愛知県立大学, 11月23日) pp.43-46。
- ・鳥取大学附属養護学校(2006)「平成18年度公開研究会 高等部専攻科学習指導案」(綴じ資料, 12月5日)。
- ・鳥取大学附属養護学校(2006)「平成18年度公開研究会 鳥取大学附属養護学校の取り組み・学部別分科会資料」(綴じ資料, 12月5日)。
- ・鳥取大学附属養護学校・教頭兼専攻科主任 藤原章(2006)「平成18年度公開研究会 高等部専攻科分科会七転び八起きの自分づくり～専攻科1年目のチャレンジを通して」(プレゼンテーション資料, 12月5日)。
- ・渡部昭男(2006)「青年期の自分づくりをめざして－附養カレッジ1年目の挑戦－」(鳥取大学附属養護学校 平成18年度公開研究会 講演資料, 12月5日)。
- ・鳥取大学附属養護学校(2007)『雲』29号(児童生徒年間作品集, 製本冊子, 3月)。

## 《新聞報道・TV報道》(報道年月日順)

- ・日本海新聞2006年4月7日付け「『みんなとまなびたい』／鳥大付属養護学校専攻科3人 鳥大入学式参列／新たな出会い 胸を弾ませる」
- ・日本教育新聞2006年4月10日付け「国公立で初／高等部に専攻科“カレッジ”開講／鳥取大附属養護学校／青年・成人期の「自分づくり」目標に／2年間で社会生活力育む／家事, 年金, 選挙など学習／大学とも連携 入学式に参列」
- ・毎日新聞2006年4月12日付け(鳥取版)「希望に胸膨らませ／鳥大付属養護学校／国公立初の専攻科／3人が入学式」
- ・日本海新聞2006年6月3日付け「“大人のたしなみ” 習慣に／鳥大付属専攻科／情報の活用など学ぶ」
- ・NHK総合2006年7月21日放映「町に出てくらしを学べー養護学校“専攻科”」(「ふるさと発」30分企画)
- ・日本海新聞2006年11月9日付け「『生き生き』 職場実習／鳥大付属養護学校／社会参加へ向け力」
- ・日本海新聞2006年11月18日付け「振り仮名表記 選管訪れ要望／鳥大付属養護学校 高等部市議選学習」

(2007年5月11日受付, 2007年5月18日受理)

平成18年度 高等部専攻科 “附産カレッジ” の教育課程  
鳥取大学附属養護学校高等部専攻科

1. 児童生徒の実態

【発達や障害の実態、自分づくりの状態】

高等部専攻科学生の自分づくりの段階は、自制心の形成から自己形成獲得期までに位置している。この時期は、自己内対話によるもうひとりの自分をコントロールし、仲間との活動で自己他者評価が可能で、人との関わりによる評価で、過去現在未来の自分を見出し、集団の中で役割感で自己を発揮することもでき、見通しのある活動展開のなかで、人や社会に自分は役立っているという自己有能感が発達推進力に成りうる特徴を持っている。どの学生も青年期後期途上の心の育ちがあり、もう一人の自分が見え始める青年を友だちとする集団での関わりから自己を客観視し、人との関わりの中で自己肯定感(役立ち感、自己有能感～「青春」)が青年期後期の自分づくりの基盤になっている。

2. 教育方針

【本校専攻設置の目的(「概要要求」から掲載)】

①知的障害者の青年期・成人期の『自分づくり』、学校から社会への移行および主体的・内発的な社会参加を支援する。

②社会生活力の育成と資格取得等により自立支援を進める。

【学生像】「『青春の夢』にチャレンジし、自らの社会生活力やコミュニケーション力を高め、自らの手で豊かな社会生活を獲得する青年」～チャレンジ、エンパワメント、共に生きる～

【教師の合い言葉】『青年期』

■ 青年期から成人へ移行する自分づくりをすすめ、青年期生活が楽しめるようにする。  
(社会生活力を高める体験・学習にチャレンジさせ、積極的に活用する力を育てよう)

■ 自己運動の2年間スパンで生活の質を豊かに高めるようにする。

■ (話し合いによる自己選択・決定・自己他者評価による新たな憧れ・新たなチャレンジの誘発を仕組みよう)

■ ライフステージを見通して支援する教師でありたい。

(学校生活から地域社会への2年間の移行支援・生涯発達支援のパートナーとして関わろう。)

☆『青年期の自己肯定感(役立ち感・有能感・青春)』をばねにして→社会生活力の獲得を図ろう

【青年期での『生活を楽しむ』授業づくりとは】

与えられた楽しみやその場の快樂だけではなく、それまでの自己肯定感の積み上げから生まる高等部専攻科生活への憧れ(思い)を学生は持っている。(「大人らしくなりたい」「声優になりたい」「大学生といっしょに学びたい」)この思いを膨らませ、仲間と共に、見通しのある活動に主体的に取り組み、自らの生活を豊かにする学習に自己を発揮し、他者評価によって仲間や他集団から認められることで、もっと社会に認められたいという「ちょっと大人」「自分ってすごい」「集団の中で役立ち感」を感じる育ちをこと、つまり、【青年期の自己肯定感・自己有能感】が楽しみではないかと考える。この「自己運動(人との関わりをなかで生活を楽しんでいる姿)の仕掛けが授業づくりの支援である。【『社会生活力』とは】

自分の障害やよさを理解し、社会資源等の必要なサービスを活用して、自信をもって自分の人生を主体的に生き、積極的に社会参加をしていく力を意味する。こうして、自分のニーズに添う その人のもっとも豊かな社会参加を実現する権利を行使する力をもつことである。

3. 青年期の自分づくり指導の重点

①くらし・労働・余暇・研究ゼミ等の活動で「青春の夢」にチャレンジし、青年期の自己肯定感から青春の思いを届け、自分の人生・生き方を開拓していく再チャレンジする力を育てる。

☆■→社会生活力を高めるカリキュラムのPDCAによる創造(今年は第1年次)

②自然・社会資源を活用し、人とのかかわりを通して、自分の長所や強さに自信をもち、自己選択・決定・再チャレンジによる豊かな生活をつくる力を育てる。

☆■→2年間のスパンで他者評価による新たな憧れの育ちを感じて、青年期の自己肯定感を高め

社会生活力とコミュニケーションによる豊かな人間関係づくりが行える支援。

③本人のニーズの変化や成長・保護者や関係機関等のパートナーの支援を得て、共に生きる地域社会生活へ移行できる力を育てる。

☆■→グループホーム体験や職場施設、大学、ポリテクセンター等での実習や各支援センターや

地等での等の協力を得て、地域の仲間と豊かに暮らすネットワークを積み上げていく。

4. 専攻科運営の努力点

① 発達・生活年齢・個性で理解する。大学生や青年との交流を通して青年期後期にあるカレッジ生という意識を高める。また、障害を前向きに捉え、ひとつの個性とあたりまえに付き合う人間関係を内外に豊かに広げ、共生の場をつくる。このため、大学、各支援機関、啓発資源を活用する。  
[カレッジ生への理解と交流→共生社会へ]

② ニーズ・進路調査・生活マップ等を活用した教育支援計画を授業に生かし、教育課程とリンクしたPDSAサイクルで指導内容と指導方法等の改善や教育資源の開拓を図り、教育課程を進化させる。また、あゆみや移行支援計画とリンクさせ、連携した支援が円滑に行われるようにする。  
[ライフステージの中での2年スパンでの教育課程等の進化]

③ 青年期後期での自分づくり、9才10才の発達、生活を楽しむ授業づくり、自己運動サイクルの過程の解明、段階別教育内容表等、カレッジ生の現実の姿と発達可能性に依拠しながら研究に着手する。  
[カレッジ生の憧れや思いの発見。広げ方、自己運動サイクルの展開等]

④ 全国未踏の分野での専攻科の生活や学習づくりが、集団の英知やアイデア、各種支援を得て行われ、校内・校外、全国へ発信できるように、専攻科部会や移行支援委員会、高等部、スーパーバイザー、各支援機関等の支援を得て創造実践する。到達点は共通理解して組織的な対応を求める。  
[学校学部集団による発達保障]

⑥ 親子懇談や支援機関、グループホームやハローワーク等、地域社会生活移行と就労を視野に入れた支援を開拓活用する。進路適正、スキルアップ、資格取得サポート、関係機関との提携等、地域生活や就労後の生活に向けた移行支援の充実を、大学、行政、福祉機関、社会教育施設等に積極的に働きかけて、移行後の生活が豊かになるようなネットワークを形成する。  
[移行支援の開拓で、「卒後も生きるネット」の創造を]

